

武蔵は右手(めて)に剣、左手(ゆんで)に箸をもって梅軒特製のソバを食べ  
んとしていた。梅軒はジリジリと間合いを詰めてくる。と、武蔵は己のうかつ  
さに愕然とした。めてに剣をもったままでゆんでの剥りばしは剥れないとい  
う事実気づいたのである。しかし、口にくわえて箸を剥るといふ考えがひら  
めくほどの余裕を武蔵は持ち合わせなかった。なぜなら梅軒が真正面から鎖鎌  
をうならせながらソバのどんぶりを片手に武蔵に向かってきたからである。と  
ころが、武蔵はあろうことかそのまま梅軒のふところめがけて飛び込んだ。そ  
して剣と剥れていない剥りばしの両方を器用に使い、ちやうどナイフとフォ  
ークのようにそれらを操ってこともなげにソバを食べ始めたのである。二天一流、  
開眼の瞬間であった。

その後、武蔵はうどん、スパゲティ、そうめん、ラーメンなどありとあらゆる  
麺類を相手に戦いを続けた。